

教育目標:	○自ら学び、よく考える	○進んで協力し、他人を思いやる	○心身ともにたくましく、最後までやりぬく
目指す学校像:	○生徒が主体的に学び活動する学校 ○教職員が協働して教育活動を創造していく学校 ○保護者や地域社会から信頼される学校		
目指す児童・生徒像:	○自分の夢に向かって意欲的に学ぶ生徒 ○他人のために労を惜しまない心豊かな生徒 ○強い意志と自信をもち、たくましく生きる生徒		
目指す教師像:	○教育に対する熱意と使命感に富む教師 ○一人一人の良さや可能性を引き出せる教師 ○研修意欲に富み互いを高め合う教師		

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	分析コメント	改善策
豊かな心と社会性	「豊かな心と社会性を育む。」 ・豊かな情操や規範意識 ・自他の生命の尊重、他者への思いやり ・公共の精神 ・人間関係を築く力 ・困難を乗り越え成長し遂げる力 ・自分のよさや可能性を認識する力 ・多様な人々と協働する力	・生徒の自己肯定感を高め、不登校やいじめ等の課題の解決につなげる。 ・道徳の時間を「自分なりの答え」を見出す時間とし充実を図る。 ・社会的能力(「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」「親和的能力」「思いやり」)を高める。	一人一人の良さを見つけ、褒め、認め、励まし、伸ばす指導(コンプリメント)を推進する。	4 100%	4 100%	1 68.0%	2 70.2%	前期に引き続き教員は、意識を高く持ち、コンプリメントを様々な場面で行ってきている。自己肯定感についての肯定的な回答は前期68.0%から、後期70.2%と微増ではあるが高めることができた。今後も自己肯定感を高めることは大きな課題である。また成果指標については、今年度の結果をふまえて目標値を検討する必要がある。	今年度異動してきた教員や新規採用者についても、コンプリメントについて共通理解がすすみつつあるが、今後も具体的な実践の共有をすすめる必要がある。また生徒アンケートで自己肯定感の低い生徒については意図的にコンプリメントを行っていくことは今後も必要である。また自己肯定感を高めるためには、中間での関係者評価で指摘にあったように、保護者からの言葉がけが大きな力となるので協力を要請していく。
			「特別の教科 道徳」は、指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」を推進する。評価は、生徒の良さを認め意欲につながる評価を行う。	3 85.7%	4 100%	4 86.2%	4 88.1%	「意欲的に取り組めた」「自分なりの答えを見いだすことができた」「自分の意見や考えを发表或し、伝えたりすることができた」とする生徒の割合を平均すると、88.1%と昨年度の最終評価の84.9%を上回ることができた。教員については、2学期のローテーション道徳による研修効果もあった。	ローテーション道徳は生徒にとっては、複数の教員から授業を受けるので様々な刺激を受けることができる。教員にとっては複数回同じ題材で授業を行うので改善点を確認でき、また他の教員の授業を見ることのできることで研修につながる。今後もこのローテーション授業を授業改善に活かしていく必要がある。
			教育活動の様々な場面で、それぞれの教員の持ち味を活かし、生徒の社会的能力を高める指導を行う。	3 89.3%	4 100%	4 88.4%	4 87.8%	社会的能力が高まったとする生徒は前期より若干下がったものの87.8%と昨年度の最終84.7%を上回ることができた。例年通りの行事等ができない中だが、代替えの行事や普段の生活の中で、様々な取り組みが社会的能力の向上につながったと考えている。	各教員のそれぞれの取り組みが社会的能力の向上にどのようなつながったかを学校全体で共有し学校の財産としていくことが課題である。またコロナ禍で今まで当たり前に行われてきた行事などの取り組みを見直すきっかけになってきたが、この機会をチャンスと捉えその取り組みの社会的能力の向上の上での意義を確認することが必要である。
確かな学力	「基礎力、思考力、実践力をバランスよく育み生徒一人一人に確かな学力を育成する。」	基礎的な知識や技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力を高める。	ICT機器の活用、1人1台の端末の活用をすすめ、また授業のユニバーサルデザイン化を図り、分かる授業をすすめる。	1 64.3%	4 95.5%	4 90.5%	4 86.6%	「授業は楽しくわかりやすい」86.6%と前期のポイントより下がったが、昨年度の最終評価84.5%を上回ることができた。教員のタブレット、プロジェクターの使用も日常のこととなり、授業内容の視覚化もすすんだ。1人1台のタブレットの活用については、校内研修も5回行い活用がすすみつつある。	教員のタブレット、プロジェクターの活用により、生徒にとってわかりやすい授業につながっている。それに伴うスライド作成の時間の確保が課題である。校内での資料、教材の活用については、今後も先行事例の収集や校内外での研修を行っていく必要がある。
			朝読書、質問教室、補充教室、サポート教室等を実施し励ましや肯定的な声かけ等、個に応じた指導を充実させる。	3 82.1%	4 95.5%	4 87.1%	4 86.3%	質問教室やサポート教室、長期休業中の学習会等で個に応じた指導はある程度実施できた。基礎的・基本的な知識や技能を身に付けられたとする生徒は86.3%と前期のポイントより下がったが、昨年度の最終評価85.6%を上回ることができた。	今後も質問教室、サポート教室の取り組みを継続していく。サポート教室は、必要とする生徒が多いので、支援員以外の補助的な学生ボランティアの活用もすすめていく必要がある。また1人1台のタブレットを活用した基礎基本の定着の方法について、効果的な方法を検討する必要がある。
学校居心地感	「生徒の学校居心地感を高める。」	生徒の心の居場所、生徒同士のきずなづくりの場所のある環境づくりをすすめる。	生徒の困難さに応じて様々な工夫や手立てを講じる。教科の学習、行事、部活等様々な場面で生徒の学校居心地感を高めるアプローチを行う。	4 100%	4 95.5%	4 89.3%	4 86.4%	生徒の学校居心地感への肯定的な回答は86.4%と前期のポイントより下がったが、昨年度の最終評価84.3%を上回った。しかし約14%の生徒が、居心地の良い場所や時間、自分の居場所がないと感じていることは今後の課題である。	これまでと同様に学校居心地感の低い生徒については、意図的に声掛けを行うなど関係を深めていく必要がある。またクラス内や校内での役割分担や部活動などで居場所をつくっていくこともすすめる必要がある。居心地感は自己肯定感ともかかわりがあるので、これを高めることからのアプローチも必要である。
			様々な機会に、生徒に役割をもたせ、生徒に「人の役に立つ力をもっている」ことを自覚させる。	3 89.3%	4 100%	1 58.3%	1 59.3%	生徒アンケート「自分は人の役に立っている」前期58.3%、後期59.3%と微増ではあるがポイントが上がった。具体的に「ここが人の役に立っている」と伝えることを心がけたことによるあらわれでもあったと考えている。また成果指標については、生徒の謙虚さもあるので、目標値の検討も今後の課題である。	自分の行動が「人の役に立っている」ことを自覚できていない生徒もいるので、「ここが、人の役に立っている」ということを伝えていくことが今後も必要である。また中間の関係者評価で指摘のあった、教員からだけでなく生徒同士の「ありがとう」の言葉がけが自然にできる雰囲気づくりもしていく必要がある。